

一日目

◎八月九月には槍ヶ岳、西穂高と計画していたが流れてしまった。九月は異常気象が続いた、秋雨前線と連続台風のおかげなのか、大阪ではないが、一か月のカレンダーで雨の日がずっと続き、晴れマークは二三次しかなかったという状態の九月だった。そういうわけで九月に行けなかった分をということでの今回の計画だけれど、今日と明日だけが晴れマーク、山から帰ったらまた雨、という二日間を利用して出発した。同道は相澤・前川両様。

◎今朝、7時に大阪を出発。滋賀県と福井県の県境あたりから降り出し今庄・鯖江のあたりまで大雨、「ワイパー君 ごくろうさん じゃが 今日は 晴れの予定だったのでは・・・」

◎一泊二日の予定で勝山に、もう使い慣れた勝山の、“東山いこいの森”、「やあ」と挨拶をして 3500 円を支払い小屋に荷物を置く。管理人の源野さんはオレより一つ下ながら元気そう。

◎勝山は近い、4 時間でやってくる。高速道路も京都東・敦賀区間を無料の湖西道路に乗る、福井北・勝山までもまた無料区間に乗る。ガソリン 6500 円・高速料金 5840 円也。これなら一人でも来れそうとにやり。

◎今年の秋は雨続き、秋雨前線という言葉も初めて聞いたかな、異常気象の状態、今日明日は晴れますという予想に反して、いまにも降りそうな天気。

◎12:30 取立山の登山口にやってきた。そこで思案、「時計回りに 行こうか」と思ったが、天気を考え、メンバーを考え、取立山ピストンで歩きだした。

◎2 年前の 10 月 13 日にもここにきて、取立山を反時計回りに回っている時に、滝のあたりで膝に違和感、痛み止めをもらい、翌日には経ヶ岳に登った。それからの一年間は膝痛に苦しんだ。二年前の痛めたその前から正座はできなかった、今は完全ではないが正座も蹲踞の姿勢もできる。正座とか蹲踞というが、まず正座、足の甲がなかなか伸びない、こいつが曲がると歩きやすい。次に蹲踞、和式便所ができなかった、膝が曲がらない、次に立ち上がれなかった。二年たった今は、腰を落として、バネのように立ったり座ったりができる、足の甲が裏返る、こんな簡単なことができるようになった、これができると歩きがスムーズだ、普段の立ち居振る舞いが素直に普通だ。まだまだ完治ではないがうれしい限り、とはいえまだ“だましすかし”で山を楽しんでいる。

◎斜面の粘土が濡れて滑る、先日来の雨が乾いていないようだ。赤兎への縦走路を探そうと、少し下ったが見つからない。かえって調べるともう少し歩いたところで T 字路があるようだ、左折で取立山を反時計回り、右折が縦走路になっている、だらだら長そうな道だ。

◎リンドウがある、まだ咲いていない、薄紫色で蕾の状態だ、これが翌日の白山では、登山道で咲ききったリンドウがたくさんあった。道々、小さい花、黄・白・紫といってもやや赤っぽいもの、やや青っぽいもの、名もなき花たちが咲いている。赤い実がある、ミニミニリンゴがある、これはなかなかの存在感なり。

◎てっぺんにやってきた、標識に 1307M と書いてある、楽しみにしてきた白山が全く見えない、雲の下に白山の麓がちょっとだけ顔を出している。固い粘土が湿ってつるつる滑る。

◎オレはもうちょっと歩きたいが、みなさん今日は散歩、取って返して、小屋でビールにしましょうという話が盛り上がる。

◎小屋に帰り、早速コンロ、ボンベ、鍋、材料を用意、ビールは水に浸けて冷やす、野菜はあらかじめ切ってくれている、火をつける、乾きものを出す、まずは乾杯である。

二日目

◎9:00 別当出会の駐車場に車を止めた。今回は前もって調べもせずやってきた、赤兎にしようか、白山にしようか、いずれにしても時間が無い、「ちょっと散歩 ちょっとさわりだけ」というつもりでやってきた。小屋の源野さんに前回、白峰温泉を紹介され、「そらあ いい湯 是非」と勧められ入ったがなかなかいい湯だった。帰って調べると、「なんだ白山の登山口以前にも来ている 登っている」ということがわかった。土日は市ノ瀬から上は行けないが、それ以外の日は上の別当まで車で入れると聞いた。別当出会の駐車場には百台を超す車が所狭しと止まっていた。久方ぶりの晴れの天気、季節もいい、みなさん白山に来ているのだ。

◎別当：人の役職の名称。本来、律令制において本官を持つものが他の宮司の職務全体を統括・監督する地位に就いたときに補任される地位。他に本職があり本職以外の別の任に当たる、後には専任の長官の名称になった。<延暦寺の僧、桐林房が、新たに延暦寺白山加賀馬場別当に任命された。そのあと、米永氏澄が白山本宮の神主に任命された。当時の力関係は、寺のほうが神社より上だったようだが、後々ごたごたが起こったようだ。>

◎地図は持ってきているが、道のことが頭に入っていない。何年か前にこの登山口から一人で登ったが、たぶんここだと思うが、まったく忘れてしまっている。林道のような登山道のようなところを大急ぎで登った、何人かの人が登っていたような記憶があるが、「これはきつい 急登だ」という記憶がない、なだらかな道だったように思う。今回は、観光新道を行くことにした。観光新道を登りだして、砂防新道を登ればよかったと後悔した、砂防新道はゴロゴロ岩の少ないおだやかな登山道だったような気がする。観光新道は岩ゴロゴロでけっこうな急斜面、エイコラえいこら登った。

◎白山に来るといつも思うことですが、道が整備されている、トイレが、避難小屋が、登山センターが、それぞれきれいに整備されている。山に登るものにとってはありがたい限りだ。

◎ブルブル、ヘリコプターがピストン運転をしている。ロープで大きな函かバケツをぶら下げ麓から頂上までのピストン飛行、オレの勝手な想像で、「セメントを頂上に上げているのかな」と思っていた。駐車場からはヘリコプターを見あげ、ワンピッチ上がる度にヘリが目線になってくる。ぶら下げているのはバケツではなく、向こうが見える函のようだ、工事の資材でも上げているのかもしれない。

◎「外来種除去作業班」と書かれたゼッケンをした方が草刈りをしておられる。「上に ハクサンオオバコ があるんですよ ところがこのあたり 外来種のオオバコがたくさんあって 交雑も盛んで 除去しているんですよ」「ああ ごくろうさまです」

◎外来種やら、交雑の話でちょっと我がぼやき。川にいる亀、彼らがどこからかやってきた外国種と交わり、いまや日本の川にはその交雑種だらけだとか。ニホンザル・イタチ・オオサンショウオ・・聞けばたくさんの動植物が交雑し、元々の日本の固有種、日本だけにしかいなかった種が脅かされてきた。外来種、交雑種を除去、淘汰しなければと盛んにおこなわれている、サルやその他の動物を捕まえ抹殺しているようだ。そんなことを聞いて、「ほんとに 固有種が大事なのかな 交雑はよくないのかな」と考えてみた。オレたちホモサピエンスもアフリカからやってきて、それこそ盛んに交雑した。おおいに交雑種のオレ、ネアンデルタール人の血もちょっと入っているなんて想像するだけでうれしくなる。

◎風を描こうよ △風の形を △風の色を △え △風 △夕日も風だよ △虹も風だよ △オーロラも風だよ △風にも形がある △風にも色がある △気持ちが大きくひろがるね

◎ゴロゴロ岩の急斜面がやっと終わった、尾根道に出た、まだまだ岩があるが、尾根道はいい。こんな青い空、こんなにすけとおった空は、今年は初めて見るんじゃないかな。向こうに山々が、まだ上に見える山々が、手が届くところに来ている、小屋がいくつか見える、下には工事用の道が見える、車がたくさん見える。上のほうはぼちぼち紅葉が来ている、崖が崩れている、その崩れた崖から勢いよく水が流れる、滝になって水がどンドン落ちていく。「うわわ～ びっくりさせるなよ」蛇だ、でっかい蛇だ、ヤマカカシかな、アオダイショウかな、ニユルリとオレの前を横切り下にくだって行った。

◎白山といっても、大きな山だ、周り全部が白山だ、たかさはあまり高くないけれど、前後左右全部白山、立派に堂々と横たわっている。水が流れ、緑、みどり葉が生い茂り、樹々が萌え、獣たちが跋扈する、ウンコがたくさん落ちている。午後になってきた、峰のあちこちに白い霞、雲が出だした。

◎2：30 別当出会いに帰ってきた、まだ昼下がりの時間だけれど、樹々の葉を通して顔に当たる陽の光がもう夕方の日差し、不思議なことだねえと思ったが、考えてみるともう3時間もすると夜がやってくる、山は日暮れが早い、麓より1時間は早く夜がやってくる、夜の山は真っ暗だ。

◎今日は時間がなかった、もう一度来たいね、ゆっくり登りたいね、いい山だ。

民衆史の遺産<抗夫> このシリーズの本の中で、この抗夫の項だけが明治以降の話、主に石炭鉱のことが書かれている。その他の項はほとんどが有史以前から中世、近世までの話、「山の漂泊民」「鬼」「遊女」「芸能漂泊民」等の本だった。抗夫という題名なので、他のシリーズと同じように有史以前から中世、近世までの坑道、金属の話、その人夫の生きざまかと思ったがそうではなく、石炭の炭鉱の話だった。なぜなら炭鉱の資料は、炭鉱労働史として膨大な研究蓄積があるのに比べ、金属鉱山のそれはいまだ手薄な状態だそうだ。そんな中身をパラパラめくって、軍艦島の話に出くわした。

石炭は室町時代に「燃える石」と呼ばれそれ以降も、農家の薪代わりに煮炊きに使われていたぐらいだったという。江戸時代の柳川藩が大がかりな採炭事業を始め、鍛冶・瓦焼・火薬製造・製塩・漁業に使われた。この炭鉱が後々の、日本を代表する三井三池炭鉱だそうだ。「月が出た出た 月が出た 三池炭鉱の上に出た」

高橋昌嗣著<僕は30号棟に住んでいた：軍艦島30号棟 夢幻泡影>

あとがきによると、1972年からの話のようだ。1972年といえばオレは26歳、著者の年齢は書かれていないが、東京のデザイン学校を出て定職も持たずカメラを持ってぶらぶらしていた著者が、東京から長崎の孤島にやってきた、5000のスーパーカブをフェリーに積み、やってきたと聞くと、「馬鹿な奴だ」と思う一方、「面白いことをしているね」とこの本を一気に読んだ。この本は写真集だそうで、文章は添え物だったかもしれないが、写真画像がモノクロで枚数も少なく、写真の楽しさはわからなかった。著者は、軍艦島に行く前に、北九州の炭鉱を回っている。オレも2000年ころの北海道、「まだ炭鉱跡がみられるか」と探し回ったが、まったくなかった。夕張も有名な炭鉱町だったと聞かすが、そんな面影の一つも残っていなかった。その代わりといったら失礼だが、北海道に停泊していたロシアの船のボロさ加減、赤錆が浮き出た船体に、ゴミのような雑貨を積んでいたのを感動して見ていた。

◎スーパーカブで、もっぱら筑豊の炭鉱後を巡った。バイクで八幡から遠賀川に沿って南下し、炭鉱を巡り歩くのが日課だった。当時はすでに廃坑になった炭鉱地帯は実にフォトジェニック（写真向きであるさま）だった。風雨にさらされ崩れかけの炭鉱所跡には、錆付いたカンテラや作業道具が無造作に打ち捨てられ、レンガ造りの高い煙突が真っ青な空に向かってそそり立つ。何に使われたかわからない大きなクレーンの台座に取り付けられたまま雨ざらしになって赤く錆付き、草木が生い茂る草地に屍を晒している。ポタ山は雑草に覆われ、自然発火しているところがある。使われなくなって久しい錆びたレールは、コンクリートで塞がれた坑道に向かってうつろげに延び、人気のない野原に置き去りにされた何台ものトロッコも錆付き、雨水を満タンにたたえている。

軍艦島：三菱石炭鉱業のなかの「端島」と言った。まさか自分がこの監獄島で働くとはと恐れつつ、もらってしまった支度金の3000円に手を付け、恐る恐る長崎港から連絡船に乗ってしまったという始まり。オレの知人も、マグロ船に乗った、どこかで働かされている、なんて話もあったようななかったような・・。

◎「監獄島」の異名でも知られたこの島は、労働組合ができる昭和21年以前はかなり劣悪な労働環境だったという。特に戦時中過酷な労働に従事させられた朝鮮人労働者の話は忘れもしない。隙間風の通る掘立小屋みたいなところに押し込まれて昼夜働かされ、ろくに食事とも与えられず栄養失調、冬の寒さに凍て、リンチが横行し、まるで監獄のようだったという。連絡船の中で、「ああ やめておけばよかった」と、寂しさと不安が一層募る。与えられた304号室は、汚い布団、這い回るゴキブリ、劣悪な環境だったが、あくる朝の抜けるような青空、かすかに漂う潮の香、すがすがしい気分になった。最初、普通のおばさんが軽々担ぐ荷が担げない、周囲からどっと笑い声立つ、「東京もんはどうせ無理だから 軽く細いものから担げ」責任者から注意され恥ずかしいやら情けないやら悔しい思いをした。日が経つにつれ労働にも職場にも慣れ、休みの日は連絡船で長崎の街に出て楽しんだ。東京では、ドロップアウトしたような長髪のもじゃもじゃ頭で、定職もない人間が見向きもされなかったが、島の人たちはとても親切だった。

田嶋雅巳著<炭鉱美人>

「赤い煙突 目あてにゆけば 米のまんまがあばれ食い」野麦峠を多くの紡績女工たちが超えていたころ、ここ筑豊には九州各県はもとより中国・四国地方から多くの人々が赤い煙突のもとに流れ込んでいました。<略>当時の採炭はツルハシを使って石炭を掘る男の「先ヤマ」と、掘った石炭をそり上の箱や竹籠で運ぶ女の役「後向き」のペアで成り立っていた。<略>当時の坑道は劣悪な労働環境だった。高温多湿、希薄な空気、長時間労働、いつ起きるかもわからない落盤やガス爆発。<略>大手中央資本の北海道と違って、中小炭鉱の多い筑豊では、女性の坑内労働者が多かった。

能美シズコ：ウチは遠賀の川筋の生まれですタイ。炭鉱で歌やらうたえるのは抗外の選炭婦の仕事タイ。ウチたちは、何千尺ちゆう地の底で仕事すると二。もう暑うして裸でしよっても汗がすだれんごと流れ落ちる。じん肺ちて、何年かたってから、吸った石炭が肺の中で固まって死んでしまうこともあるとバイ。採炭は、男が先ヤマ、おなごは後向き、賃金は五分五分ですタイ。

原田ツマ：ワシは九つ時から、なごう抗内で働きよった。事故に遭うたことはない。そいき、やっぱ、炭鉱は大勢死によった。函ヤマやったら男はたいがい函に乗って上がりよる。おなごは肝が細いき、たいがい函に乗りきらん。先ヤマの男と、後向きのおなごが、駆け落ちしようとして、男が函に乗って、後ろのおなごを振り返った。函が上がりよる時、函の淵と枠に挟まれ、首がちぎれてしもうた。血がだらだら流れてきよったバイ。

西嶋ヒサエ：ウチは十四歳の時には地の底を四つん這いになって這うたとバイ。テボ（ザル）をかるうてスラ（阿修羅？函？）を曳いてな。今の仕事は機械がするとヤキ。百姓仕事デン、土方仕事デン、天と地ほど違う、昔は人間の手と足だけですバイ。坑内に下がりよる時、岩が頭に落ちて鼓膜が破れたト。ガス爆発にも遭うたこともある。ウチは二番方ヤキ助かちよるタイ。死体を人車に乗せていくつも上げよった。あのころが一番懐かしいよ。マイトの孔を割る時ナン、歌どんうとうて楽しかったよ。

永山アヤコ：私はなあ、ご飯一膳のどを越すなら寝込むことはイラン、お産をしたより他にやあ寝込んだことがない。昔は大きな腹かかえて、坑内に下がりよったヨ。「おい 永山 もう休んでくれ 坑内で子供生まれたらおおごとぞ」役人がやかましゅういいよったが、「いいやないね 坑内で死んで上がるもんは なんぼでもおるバッテン 生まれて上がるとは 縁起がよかろうや」病弱な旦那と6人の子供を食わせてきた。町の人には炭鉱で働く人のことを、「炭鉱モン」ちゆうて見下げよったが、町の人の方がよっぽどか人情が薄いですタイ。

数山ウメノ：嫁さんになってたった三日休んで、私は婿さんの後向きで採炭に下りました。人は、「炭鉱は恐ろしい」ち、いいよったけど、私は婿さんと一緒やき一つも恐ろしいことはなかった。おなごは好いた男と一緒になら、ドげな苦しいことがあっても苦にならん。婿さんと一緒なら、たとえ坑内で死んでも思い残すことはない。私は婿さんのことをあんまりにも好いちよるタキ、子供がポロポロできて、全部で11人産みました。

松岡ハツエ：炭鉱の歴史は部落（被差別）の歴史でもあるんですタイ。死ななならん地の底に下がってお金を稼ぐちゆうことは、貧乏な部落の人でなからな、なかなかしきらんですタイ。徳川時代の穢多、非人ちゆう身分差別の中で、部落の人は貧乏してきちよるでしょうが。ウチは五つ六つのころから弟の守りをするに坑内に下がりよったですバイ。ウチは自分が部落ちゆうことは子どものころから分かったですバイ。「えたごろ」ちて、石やら投げつけられたですきに、こまい時から身に染み込んじよります。「あの村さ行くな 恐ろしいバイ」「部落のものは汚い」ウチたちは貧乏して、解放運動してきた。

◎一か月も前から、「西穂の小屋でテントを張ろう」と決めていた、雨続きの今年の秋、今週こそ晴れそう、「行きましょう」と声をかけると、「体調の関係で屋根がいい 東山いこいの森がいい」という声が聞こえた。急ぎ源田さんに連絡を入れ、一棟予約ができた。いつもの、相・前・増・岡の四人である。岡村車で7時に出発、それぞれの家をまわり、吹田 IC→京都東 IC→湖西道路→敦賀 IC→勝山 IC 東山いこいの森にやってきた。

◎1:40 取立山登山口。12 時ころ勝山 IC を出て、「今日は早いな 登れるな」と思っていたが、食料買い出し、めし屋探しなどと時間をくい、結局小屋で、スーパーで買った弁当を食って、登山口にやってきた。

◎今日は多少天気も良さそうなので、時計回りに歩き出した。平らな穏やかな道をしばらく行くと多少の下り、このあたりが谷筋になり、水音が聞こえ、滝があらわれる。水の流れるところを横切り、ロープがついている石ゴロゴロをよじ登り、エイコラサと登りになる。10 月半ば、標高はてっぺんで 1300M と低い山、まだまだ紅葉には至っていないが、赤い葉、黄いろい葉がちらほら、肌寒くも感じる、とはいえ登りは汗びっしょり。

◎二年前は反時計まわり、今日は時計まわり、植林の中、左側に深い谷、谷が登山道にくつつくあたりに滝があり、しばらく上ると避難小屋がある。避難小屋は立派な建物で、暖炉が在り薪がいっぱい積んである、たぶんみなさん冬の雪山を楽しんでおられる姿が目につく。東山いこいの森の源野さんが言うには、冬は、「国道に車がたくさん止まっている、取立へ登っている人が多いよ」ということだった。来れるものなら来てみたいねえ。小屋付近は水芭蕉が群生しているらしい。しばらく歩くと、上は穏やかなもっこり高原、右に左に夕方の陽の光がきらめく、夕方の光は赤っぽい。大長・赤兎への縦走路があるかと思ったがなかった。強者の皆さん、雪山の季節、雪の上を、真っ白い道なき大地を、地図を頼りに歩いて行かれるようだ。

◎先日は今にも降ってきそうな空模様だったが、今日は快晴ではないが、青空で陽も見える。天気がいいと気も晴れ、快適で楽しい。週日なのに人が多い、駐車場には 10 台以上が止まっていた。

◎頂上に近づいてきた、なんだか臭う、糞の臭い、おそらく鹿だろう、たくさんいるのだろう。登るにつれて、紅葉が増してきている、この辺りは豪雪地帯、来れるものなら雪の季節にやってきたいものだが、年齢制限かな。

◎不思議な光景、晴れているのにぼこりん山の斜面を霧が走っている、霧化、雨か、雲か、暑いときなら口を開けて待っていれば旨だろう。青空に太陽、こちら黒い雲と弱々しい入道雲、飛行機雲も伸びつつある。

◎取立山てっぺんにやってきた。白山は霧の中でまったく見えない。この辺りは低い山また山の地形、その山々の間に田んぼが、家が、川が、道が、それぞれキラキラ光っている。夕方の空、日暮れまで 2 時間もないだろう、雲の間から光がもれる、影が放射に走る、誰かが天使の階段と言っていたがあれがそうなのか。

◎硬い土の表面が濡れている、雨が降ったのか、滑りやすい、つるりすべると痛そうだ。

◎先ほどマムシを見た、すり横切った、今年は初めてのマムシ、大きく太っていた、さあねんねかな。

◎5:30 駐車場に降りてきた。今日の夕日はきれい、間もなく陽が落ちると言うタイミング、赤く黒く雲が踊る。

◎小屋に入って、「さあ 乾杯 晩ごはん」ここは電灯が点く、ちゃぶ台がある、「小さい電気毛布 ありますか」「まかして」と持参した電気毛布を敷いた。まずは缶ビール、サラダはトマト、キュウリ、レタス、黄と赤の福神漬け、レモン、漬物、チーズ。ごはんを温め次にカレーを温める。今回は西穂の小屋に荷を担いで登る予定が急遽変更になって、ここ、東山いこいの森に来た。「2 時間弱 荷を担いで 登りますよ」という予定で、食事も軽いものを用意していただいたので、途中のスーパーで、旨いものをいくつか追加した。

二日目

◎7:20 国道を少し福井方面に走ったら、赤兎登山口と書かれた板の看板がある。戸数の少ない村の中をくねくね行くとロープが張ってある、おじさんが出てきた、4 名で 1200 円也の通行料を支払う、「5 時までに降りてきて」というおじさんの声。赤兎の登山口までがけっこう長い、舗装された林道を徐々に登りつつ車は走る、まわりは自然林、まだまだ葉っぱは色づいていない。

◎小原峠までの登山道、広葉樹林帯のこの辺り、まだまだ葉っぱが生い茂り、ちょっとずつ黄色くなりかけ、緑の中に黄色が混じり、幻想的な色彩が波うつ。横は川、ザーザーザザ流れる音、赤い葉もたまにはある。

◎小原峠、文献によると、銀山、一向一揆、物流の道、白山への信仰の道、という顔が見える。

◎「あれえ これは ブナじゃないの ブナの森だ」ぼ〜っと歩いていて、ふと気づいた、直径が 20~40 センチの細く若いブナの木が林立している、上の方までひょろり伸びている。このあたりのさわやか黄色は、ブナの葉が黄色く色づき始めているのだった。この細さのブナ林もいいものだ。

◎小原峠で小休止。「大長山（おおちょうさん が正解 だいちょうさん と言っていたが）も登りたい、と小声で言ったが、まずはみなさんを赤兎にご案内、今回の目玉は赤兎ですぞと自戒。

◎昼前に赤兎山山頂。「早い湯を沸かしましょうか 食ったら Mさんと二人 大長に登り返してください」「おお ありがとう」カップヌードルに湯を注ぎ、持参のパンをほうばった。山頂からちょっと先に避難小屋があり、このあたり、もっこり平らで景色もいい、気持ちもいい。目の前に白山が座っている。

◎2004年にここに来て、避難小屋に一泊お世話になった。澤山・猪熊・衣川・岡村の4名で寒い季節にスキー場の方から入り、雨天なのでそのまま帰った記憶がある。写真を見るとみなさん若々しく、えらくはしゃいでうれしそう楽しそうな姿が写っている。赤池湿原の木道の上で、下着姿、上半身が裸姿のおっさん連である。

◎お言葉に甘え、いざ大長山へと、赤兎山頂からとことこと下り、小原峠までやってきた。登る時もここで会い左右に分かれたおっさんが、汗をぬぐいながら、弁当を食べておられた。大長はどんな山ですか、「凸凹がいっぱい 登っては下り・・・」と笑っておられた。

◎登っては下りを三度ほど繰り返して見上げると、てっぺんが見えてきた。ここらあたりも赤兎同様、細く若々しいブナの林だ、さわやかな風が吹く。薄暗い雲が飛んで晴れてきた、陽が出てきた、青空が見える、樹林帯の隙間から向こうに白山が座っている、今の季節の白山は黄土色だ。

◎だんだん高度を上げてきた、「あのぼこり てっぺんまで 30分で 行けるのかなあ」と危ぶみつつ、三点歩行の石ゴロゴロの急斜面を登っていく。「え あそこまで ワンピッチ・・・？」いつも頂上直下のあたりで、「あんな高いところまで そんなに早く 行けるものかな」と思うのだが、案外早い時間で着いてしまう。下では、ハーハー言いながら一步一步をワンピッチ、ツーピッチと登っているが樹林帯なので自分の位置がわからない、その点てっぺんが見えだすと、「うええ 高いぞ」と思うがすぐに着く、てっぺんマジックだね。

◎30分たらずで頂上かと思ったがてっぺんに在るはずの標識がない、やっと登ってきたと思ったが、どうもてっぺんはもう少し先、「あっちゃっちゃ」と苦笑しながら5分ほどで到着した。1671M「おおちょうさん」と読むとは知らなかった、もう一つ、なんとこの山はここらあたりの最高峰だという。大長：1673 赤兎：1629 経ヶ岳：1625 荒島岳：1523 関学の学生、雪山遭難事件は大長山らしい。

◎小原峠から3時間をもらった、「3時間で てっぺんに 着いても 着かなかっても 降りてくるから」と駐車場で待ってもらった。下りは急いで降りた、休憩もなく、水を飲むだけ、早足で降りた。同道したMさん力強い足取だ。同道にはピッタリ、別の山も、もっと同道したいものである。最近同年輩の山仲間が、体調不良、体力不足、「もう山は嫌だよ」といいだし、山仲間がいなくなった。友人曰く、「一人登山は 危険 発見も遅れるし」

◎そのMさん、登りの途中帽子を落としたようで、「帰りに 帽子 見つかりますよう」と願っていたら、どなたかが木の枝に引っ掛けてくれていた、これはうれしい、他人事ながら、うれしい。

◎4時に駐車場に着いた、待っていただいた、「さあ 出発」と車を走らせた。急いなので汗びっしょり、30分もすると、あくびの連発、しかも寒くなってきた、まずはスーパーに寄り、ビールやら野菜やらを購入、早く湯に浸かりたいので、白峰温泉まで行くのをあきらめ、勝山の水芭蕉の湯に入った。ここは大きな風呂、人も多い。最近知った白峰の湯、源田さんのいうところ、「そらあ つるつる いい湯ですよ」というが、水芭蕉の湯に比べ、規模も小さく、人も少ない。湯の良さは、雰囲気は白峰がいい。小屋に帰って、乾杯である。

◎今期は、東山いこいの森に4回もやってきた。大阪から近い、一棟3500円と安い、2人でも5人でも同額、小屋に電気が来ている、水道・トイレ・シャワーもあるようだ。管理人の源田さんとも懇意になった。翌日は、白山平泉寺を巡って帰った。

いこいの森の帰り道、白山平泉寺に寄った、「ほ こんなに立派 寺か神社」とまず驚いた。足を踏み入れ、木造建築物が年を経て柱や壁が輝かない銀色に、黒瓦も輝かない銀色に、素朴に積み上げられた石垣も崩れたところがあり、隙間からは草やら苔やら、そんなモノトーンの世界が広がる。いやモノトーンではない、一面に広がった苔の絨毯、樹々の緑がモノトーンによく映え幻想の世界が広がる。こんな田舎に、平安時代・戦国時代に、たくさん人間が集まり、戦い、祈り、どんな社会を作っていたのか、どんな輩が徘徊していたのか。

オレが若いころは、日本海側を裏日本と言っていた、夏の海水浴、冬の旅、そんなこんな十年に十度も訪れていたかなというぐらい疎遠なところだった。ところが 40 歳代から山に登り始め、年に何度も福井・石川・富山などの県を訪れている。良寛さんの出雲崎や、佐渡島までは少々遠く足が延ばせない。福井は遠いと思っていたが、先日の北海道旅行の折、車で 3 時間ぐらいで敦賀港に着くことがわかった、「なんだ 近いんだ 湖西道路を使えば 安くも行ける」最近では太平洋を見ることの方が少なく、もっぱら日本海だが、グルメに縁のないオレは、旨い飯、美味しい魚にはお目にかかれないう、このごろなり。

白山には何度か登った、どうも白山と言ってもこのあたり全部が白山なのか、三つの頂上は名前が違って、“御前峰” 2702 “別山” 2399 “大汝峰” 2684 というような名前が付けられている。白山にはあちこちに立派な避難小屋がある、何度かお世話になったが、大峰奥駆道と同様、修験者のために造られた小屋なのか立派だ。

◎禅定道は三本あり、その起点を馬場という。加賀禅定道：白山比咩神社（ひめ）・越前禅定道：平泉寺白山神社・美濃禅定道：長滝白山神社（ここは石徹白の白山中居神社から南へまだ 10 キロほどのところにある）

◎石徹白道（いとしろ南縦走路）登山口には、石徹白の村の中、“白山中居神社” から林道を奥まで車で進んで登り始めた。コースタイムで 12 時間となっている、別山までなら 7 時間半。横に“野伏ヶ岳” 1674 があり、昔の山仲間大勢で雪山を登った思い出がある、石徹白の民宿で一泊し楽しんだ。

◎越前禅定道：先日の“赤兎山”の登山口は越前禅定道となっている。小原峠をまっすぐ突き切り、今の白峰からの道と合流し、市ノ瀬→観光新道を通って上に登るようだが、本来の出発地は平泉寺白山神社からなので気の遠くなるような遠い距離だ。ここ平泉寺白山神社の奥に獣除けの金網があり、登山口と書いてある。

◎加賀禅定道：ここからは登ったことがないが、白山の北の方、一里野（いちりの）から登るようになっている。コースタイムで 11 時間半となっている。

◎平瀬道 白山の東、荘川桜や御母衣ダム湖のあたりから車で、大白川ダムの駐車場まで車で入る。何度か入ったが、季節外れに行ったので、キャンプ場や温泉にはあたらなかった、ここが一番てっぺんに近いかもしれない。コースタイムで 5 時間となっている。

白山平泉寺は 717 年、修験者の泰澄が開いた。一向一揆による焼き討ち 1574 年までの 850 年間栄華を誇った。明治の神仏分離令により、寺号を捨て神社として生きていくことになり、寺関係の建物が解体され、現在は、“平泉寺白山神社” となっている。栄華を誇った、白山平泉寺には僧兵が 6000 人とも 8000 人居たと書いてある。これを戦いで破った一向一揆側にも同じような数字の人数がいた、戦いがあった時代は戦国時代、雪国の白山麓で覇権を競って宗教組織に与する人数が刃物を持って戦った。この時代には刃物だけでなく鉄砲もあったのか、なかったのか、いずれにしろくんずほぐれずの肉弾戦があちこちで繰り広げられ、火を放ち、略奪強奪のかぎりの日々。この寺というのか神社というのか、敷地全体の石畳が変わっている。表面は大き目の座布団ぐらいの石が隙間なく並べられている。九頭竜川の河原から運ばれてきた石を並べ、土をかけ、豪快で歩きやすい石畳になっている。これだけの大きな石畳ならば、上の木造建築物が消失しても、基礎やら塀やら石畳が見つかりやすい。発掘現場と書かれた看板を横目で見ながら、通りすぎてしまったが、さぞや面白い石畳がみられたのではと再会を期待したい。

栗林一路著<登山家の古典散歩>この本を手に取り、“はじめに”をパラパラめくった。

私たちの祖先がどんなふうにも山や自然を眺め、感じていたのか・・・と著者の話が始まる。

◎BC800年ころのホメロスが、「山は羊飼いにあっては都合の悪いものだが、盗賊にとっては夜よりもいっそう都合のいい、霧の立ち込めるところだ」盗賊たちは山にこもっていたらしい。

◎BC400年ころのプラトンは国家論で、「人間が肉体を鍛えること 健康こそ生きがいである」弟子のアリストテレスは、「余暇を持つのが自由人の権利であり 余暇を充実させるのが 人生の目的だ」日本がまだ弥生時代に、近代的考えの発想があったことが驚きである。

◎和辻哲郎が“風土”で、自然環境の違いが発想の違いをもたらしている。東西文明の違いは、“肉食対草食”“乾燥対湿気”“自然征服対自然順応”“一神教対アニミズムやシャーマニズム”“冷厳過酷な自然対温暖豊潤な自然。

こんな話を“はじめに”で見つめ、オレの頭の中が駆け巡った。「そうだ あんなことが こんなことが」と過去に体験した山の中での気候の話、感性の話、伝説の話が、湧きあがったので、思いつくままに羅列してみました。

◎ひんがしの 野にかぎろふの 立つみえて かえりみすれば 月かたぶきぬ

692年 柿本人麻呂 壬申の乱（天智天皇の子：大友皇子に対し、天智の弟：大海人皇子が反旗を翻した戦い勝利し、大海人が天武天皇になった）乱が終わり、宮廷歌人の柿本人麻呂が吉野宮付近、大宇陀地方を歩き詠んだとなっている。この地方は標高340M、南東にはオレが何度か登った台高山系の北端、高見山が見え、東の方には吉野の山々が見える。霧が真っ白に覆う快晴の冬、早朝に東の地平線が朱色に紫色に染まり、かぎろうらしい。陰暦の11月17日、の早朝が大宇陀で、「かぎろひを観る会」があるらしい。この歌は気持ちがいい、すっと入ってくる、と心底思う。ほかの歌も長歌もいいと思うのだけれど、絵画や音楽はきわめて抽象的なものに比べ、宮廷歌人の彼の歌が、宮廷賛歌の歌であることに、少し辟易するのはオレだけなのかな。昔からこのあたりの、この気象現象はつとに有名らしく、知人の写真好事家も、かぎろひを撮りに何度も通ったと述べておられた。

◎修験道の山というと、“大峰奥駈道”“立山”“御嶽山”“白山”“石鎚山”と数々の山が浮かんでくる。他にも“甲斐駒が岳”やら“剣岳”のてっぺんには、祠があり、石の地蔵があり、近代登山が始まるずっと以前に奉納された剣やら杖が出てくるそうで、昔から高い山には修験者が登っていたようだ。先日来の本の中の諸説によると、修験者は有史以前から山に棲み山を歩き山を知りつくした民が、山の恵みを、山の獣を、山そのものの自然や恐ろしさを、想い祈り暮らしていた中から生まれてきたものと思う。そんな想いや祈りが、神道の教え、仏教の教え、そんなこんなが混ざり合って形を変えながら今にあるのかなと思っている。今でも白装束に身を包んだ善男善女が、またまた険しい顔をしたおっさんが、地下足袋ですたすた歩く姿はよく見かける。古代彼らは、鉾山師でもあった。金・銀・銅・水銀の鉾脈を探し、坑道を掘り、それらの石を運び出し、金・銀・銅・水銀などを取り出すプロでもあったと書かれている。

◎昨今好事家にもてはやされている、“雲海”は何度か見ました。一番感動したのは剣乗越から見た雲海。麓の立山駅からケーブルとバスを乗り継ぎ、室堂から雷鳥沢を登っていた。もうすぐ乗越だという手前で振り返って下を見ると、夕日に照らされた雲が川のように、雄山から西に向かって大きな谷筋を流れていた。斜面の草は枯れ、夕陽の光できらきら光る、後ろの雲海は川のように流れ、そこが滝でもあるかのように下に向かって消えていく。その時に見えた雲海はどす黒く、速い流れがどんどん消えて行った。

◎もう一つは中央アルプス空木岳の南に、念丈岳（2282M 常念岳ではない）・烏帽子ヶ岳という山がある。この山から南東は伊那谷、この伊那谷が有名な雲海の里だという。てっぺんのどこかでテントを張って仲間たちと寝た。夜中に、「すごいよ 星が」と起こされたがすぐに寝た。朝方、下には絵に描いたような雲海が広がっていた。